

# 世紀転換期のニューヨーク

## —アメリカ文学における摩天楼の表象—\*

砂川典子

### New York at the Turn of the Century: The Representation of Skyscrapers in American Literature

Noriko Sunagawa

#### 1. はじめに

南部再建から世紀末のアメリカは、急激な産業化や工業化、さらに都市化が進んだ時代である。さらに、1900年前後になると、巨大企業が成長して財閥の支配も強まり富の集中が起こる一方、ヨーロッパからの移民の大量流入による問題もあり、社会矛盾も深まっていった。

このような時期にアメリカの都市に現れたのが超高層建築物、いわゆる摩天楼である。大都市という決して広くない土地に人口が密集した場合、建築が高層化するのとは必然であるかもしれないが、<sup>1</sup>アメリカ以外の国で多くの人口を抱えた大都市に摩天楼が競うように建築されるようなことはなかった。つまり、世紀転換期の摩天楼の建設ラッシュは、アメリカ特有の現象であるといえる。この論文では、Henry Adams (1838-1918) と Henry James (1843-1916) の著作を中心に、世紀転換期のニューヨークと摩天楼の表象について考察したい。

#### 2. ヘンリー・アダムズとその時代

ヘンリー・アダムズは、ヘンリー・ジェイムズの5歳年長の歴史家・作家で、二人は頻りに手紙をやり取りしあい、生涯を通じて親しい友人であった。アダムズは、曾祖父John Adams (1735-1826) が第2代大統領、祖父John Quincy Adams (1767-1848) が第6代大統領、父Charles Francis Adams (1807-1886) が弁護士・政治家・外交官という政治一家に

生まれた。アダムズ家はいわゆる「パワーエリート」で、“natural aristocracy” という非アメリカ的な考え方を持っていたこともあり、アダムズは将来政治家として大成することを囑望されており、またアダムズ本人もそれを期待していた。しかし、それは叶わず、ハーバード大学で中世史を教える教授となり、文筆家としても名を馳せたが、本人は忸怩たる思いを抱えていたと言われている。

1870年代から1880年代の南部再建終了から世紀末はいわゆる「金びか時代」と言われるが、その名の通り、資本主義の発達や急激な産業化や工業化、都市化が進む一方、拝金主義が蔓延し金権政治に陥っていた。政治家は汚職とスキャンダルにまみれ、悪徳資本家が、投機、鉄道や船舶、金融や不動産で巨万の富を築いていたのだった。アダムズの兄であるJohn Quincy Adams (1833-1894) は、共和党に反発して民主党に鞍替えし、マサチューセッツ州の下院議員として活躍したが、州知事にはなることが出来ず、また、Charles Francis Adams (1835-1915) は鉄道委員となって鉄道規制のモデルを作り、ユニオン・パシフィック鉄道の社長を務めたものの、労働争議の鎮圧や経営をうまく立て直せず、辞任した。つまり、この時代に、アダムズ家の人々のようなエリートは、以前のように必ずしも政治や実業の世界で成功するとは言えなくなったのだった。

一方、この時代にアダムズは、1872年に結婚し幸福な結婚生活を送っていたが、1885年に妻を自殺で亡くし、1892年にフランスの教会建築を見て回るようになった。以下の引用は、アダムズの1904年のニューヨークの描写である。

The outline of the city became frantic in its effort to explain something that defied meaning. Power seemed to have outgrown its servitude and to have asserted its freedom. The cylinder had exploded, and thrown great masses of stone and steam against the sky. The city had the air and movement of hysteria, and the citizens were crying, in every accent of anger and alarm, that the new forces must at any cost be brought under control. Prosperity never before imagined, power never yet wielded by man, speed never reached by anything but a meteor, had made the world irritable, nervous, querulous, unreasonable and afraid. (*The Education of Henry Adams* 377)

この引用から分かるように、ニューヨークは「力」「混沌」「繁栄」「スピード」を象徴しており、アダムズの目の前に広がる世界は絶えず騒々しく、不安定である。また、こうした時代に求められるのは、アダムズ家の人々のような由緒正しい古い家柄のエリートではなく、新しいタイプのパワフルでエネルギッシュな人々であった。

All New York was demanding new men, and all the new forces, condensed into corporations, were demanding a new type of man, — a man with ten times the endurance, energy, will and mind of the old type, — for whom they were ready to pay millions at sight. As one jolted over the pavements or read the last week's newspapers, the new man seemed close at hand, for the old one had plainly reached the end of his strength, and his

failure had become catastrophic. (*The Education of Henry Adams* 377)

アダムズは、このようなアメリカから背を向けるように、フランス中世の教会建築の研究に没頭し、反時代的考察とも呼べるモン・サン・ミシェルとシャルトル大聖堂の研究である *Mont Saint Michel and Chartres* (1904) と自叙伝である *The Education of Henry Adams* (1918) を執筆した。

### 3. ヘンリー・アダムズと大聖堂

Edgar Allan Poe (1809-1849) は、アダムズやジェイムズよりおよそ一世代前の作家であるが、1848年に奇妙な小説を残している。

They were by no means uncivilized, however, but cultivated various arts and even sciences after a fashion of their own. It is related of them that they were acute in many respects, but were oddly afflicted with monomania for building what, in the ancient Amriccan, was denominated "churches"- a kind of pagoda instituted for the worship of two idols that went by the names of Wealth and Fashion. In the end, it is said, the island became, nine tenths of it, church. ("Mellonta Tauta" 362)

この“Mellonta Tauta”という短編小説は、時代設定をその1000年後の2848年としたある種のSF小説で、ある男が気球に乗って知人に手紙を書くスタイルをとっており、そこでは「アメリカ人の古代」に関する記録がある。超高層建築が出現するのは19世紀後半であり、ポーがこの作品を書いた時にはま



画像 1

だ超高層建築の群れは現れていないが、その後まるでポーの予言そのままのものが現れる。「富と流行という名の偶像を崇拝するために建てられた（教会と呼ばれる）塔」が競うように建てられたのは、20世紀になってからである。

これは1900年のマンハッタンであるが、この頃から超高層建築が増えてくる。当時アメリカを見たヨーロッパの人々から、これらの建築物は非常に新しくアメリカ的なものだと見なされ、ニューヨークが中世ヨーロッパの塔の町に、また、塔のようにそびえたつ建物が大聖堂に喩えられた。より高い建築物を建てたいというのは普遍的で、人間の本能的な欲望であるともいえるが、アダムズは、アメリカに現れた中世の塔の町—ニューヨーク—に反発するかのように、いわゆる本物の中世の塔の研究に没頭していく。

以下は、シャルトル大聖堂について記した文章である。アダムズは中世を人々の信仰が最も高まった時代であると考え、その象徴として大聖堂の尖塔をとらえていた。また、教会内部のヴォールト（穹窿）を、神の持つエネルギーや英知、そして目的と競おうとする人間の努力であると思なしていることが分かる。

it [the spire] typified the aspirations of man at the moment when man's aspirations were highest. (62)



画像 2

You may, if you like, figure in it a mathematic formula of infinity, — the broken arch, our finite idea of space; the spire, pointing, with its converging lines, to Unity beyond space; the sleepless, restless thrust of the vaults, telling the unsatisfied, incomplete, overstrained effort of man to rival the energy, intelligence and purpose of God. (103)

また、以下は*Mont Saint Michel and Chartres*の最終部分で、ゴシック大聖堂の特徴を述べた箇所である。酒井健によれば、シャルトル大聖堂に代表されるような、過剰ともいえる装飾性に満ち、あくまでも高くあろうとするゴシック建築は、人々の信仰心の表れではあるものの、それは同時に王や教会の権威の象徴でもあったが、<sup>2</sup>アダムズには中世の教会建築はいわば理想化されていた。

Perhaps the best proof of it is their apparent instability. Of all the elaborate symbolism which has been suggested for the Gothic cathedral, the most vital and most perfect may be that the slender nervure, the springing motion of the broken arch, the leap downwards of the flying buttress,—the visible effort to throw off a visible strain,—never let us forget that Faith alone supports it, and that, if Faith fails, Heaven is lost. ... The delight of its aspirations is flung up to the sky. The pathos of its self-distrust and anguish of doubt is buried in the earth as its last secret. (359)

アダムズによれば、大聖堂とその象徴性を支えているのは信仰のみであり、その「信仰の喜び」が天に向かって伸びているものなのである。つまり大聖堂の尖塔の高さ、あるいはより天に近くあろうとする高さへの憧憬は、信仰の篤さの象徴なのである。

ひるがえって、19世紀後半から20世紀初頭の塔の町であるニューヨーク、あるいは大聖堂である超高層建築はどうだろうか。

#### 4. ヘンリー・ジェイムズとニューヨーク —「商業の大聖堂」と教会—

アダムズが20世紀初頭のニューヨークをどのように見ていたかを前述したが、一方ジェイムズも全く同時期にニューヨークについて記録を残している。

But the real appeal, unmistakably, is in the note of vehemence in the local life of which I have spoken, for it is the appeal of a particular type of dauntless power. The aspect the power wears then is indescribable; it is the power of the most extravagant of cities, ... (*The American Scene* 72)

the air as of a great intricate frenzied dance, half merry, half desperate, or at least half defiant, ... (73)

One has the sense that the monster grows and grows, flinging abroad its loose limbs even as some unmannered young giant at his "larks," ... (73)

アダムズと全く同じように、ジェイムズはニューヨークに「都市の持つ圧倒的な力」「喧騒（人混み、交通といった様々なエネルギー）を体感し、「膨張する怪物」に喩えている。そして、このようなニューヨークの象徴として摩天楼をとらえているが、ここで一つ述べておかねばならないのが、現在我々がニューヨークと聞いて思い浮かべる代表的な摩天楼—エンパイヤステートビル、RCAビル、クライスラービルディング—は、1930年頃に建てられたものであり、アダムズやジェイムズが当時見た摩天楼ではないということである。1900年前後に二人がニューヨークで見たものはいわゆる「初期」の摩天楼と言われるもので、鉄骨、フレームが露出しているのが特徴的な摩天楼と比較すると、こうした「初期」の摩天楼は、レンガや石を使った古いヨーロッパの聖堂や建物と、新しい鉄の建築の折衷のようなものになっている。ジェイムズは、このような摩天楼を以下のように記している。

the multitudinous sky-scrappers standing up

to the view, from the water, like extravagant pins in a cushion already verplanted, ... (74)

they are impudently new and still more impudently "novel" — this in common with so many other terrible things in America — ... (74)

Crowned not only with no history, but with no credible possibility of time for history, and consecrated by no uses save the commercial at any cost, ... (75)

they [skyscrapers] represent, for our time, the only claim to any consideration other than merely statistical established by the resounding growth of New York. The attempt to take the aesthetic view is invariably blighted sooner or later by their most salient characteristic, *the* feature that speaks loudest for the economic idea. (92)

空に穿つ摩天楼は「針山」に喩えられ、「ほかのアメリカ的なものと一緒でずうずうしいくらいにあからさまに新しい」ものであり、「商業という点を除けば特に使用目的もない」と批判的である。

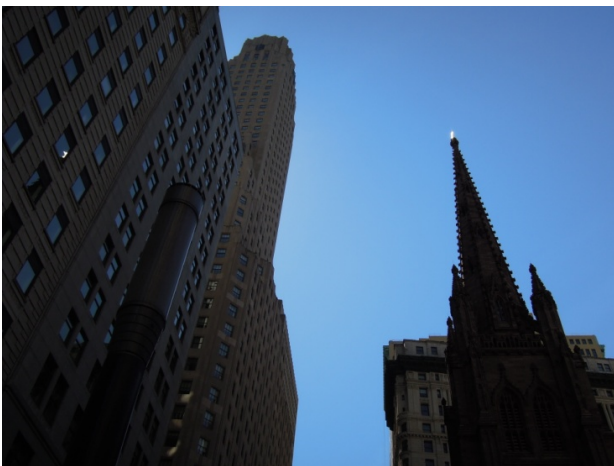
また、アダムズが中世のゴシック建築に見出した象徴性とは対照的に、摩天楼は「目新しさ」、「商業」や「経済」を象徴しているにすぎず、ジェイムズはそれ以外の価値を見出していない。摩天楼に関する研究を行ったトーマス・ファン・ウェーレンは、アメリカの摩天楼の特徴や象徴について、その昇高性は「すなわち熱狂的で、非理性的な、おそらく無自覚ながら何かを祝しどこまでも高く建ち上げたいという欲望」(98)を反映しており、その欲望は「権力で人々を支配するよりも、その権力をもつばら物に移し替えようとするのである。これこそが、おそらくアメリカの摩天楼現象のもっとも重要な一面である。権力は物質に、あげくは建物に変形されるのであった」(127)と分析している。

中世の大聖堂の一つの大きな特徴でもあった人々の高さへの憧憬は人々の信仰の現れで、無限や神への憧れだったが、「商業の大聖堂」とも呼ばれた摩天楼に対するそれは全く異なるのである。元々摩天楼

はジェームズが喝破していたように単なる商業建築であり、施工主である資本家の意志が強烈に反映されやすいものである。その意志や欲望が超高層建築といった建物に変形しているため、その高さはそのまま施工主の意志や欲望の強さ、あるいはビジネスの成功を計ることが出来る指標となるのである。ジェームズは当時のニューヨークを「膨張する怪物」に喩えたが、それを象徴する摩天楼が、限りなく肥大していく欲望や富、そして資本主義的な競争を示しているのである。

ウェーレンは、摩天楼が出来てニューヨークの風景が変わった点について、最も高い建物が教会から摩天楼に取って代わられたことを挙げている。

ニューヨークでもっとも高い塔はそれまでトリニティ教会の尖塔であった。伝統的に塔が表現しているものは、地上と天国の中間領域に対する、教会の占有権であった。摩天楼が建てられるようになって、この占有権に挑戦状が突きつけられた。(中略)トリニティ教会の塔は実際、新しい摩天楼を測るスケールにすぎず、世俗の野望を抱いた新しい塔によって、「矮小化」されたり、「蝕」にされたり、もてあそばされるだけだ。(21-22)



画像3

つまり、教会と摩天楼の並びは、「聖」と「俗」の逆転の可視化なのである。ジェームズも、このトリニティ教会と摩天楼の対比—世俗の野望を抱いた新しい塔による教会の「矮小化」—について、*The American Scene*の中で以下のように述べている。

Beauty indeed was the aim of the creator of the Trinity Church, so cruelly overtopped and so barely distinguishable, from your train-bearing barge, as you stand off, in its abject helpless humility; ... (75)

the vast money-making structure quite horribly, quite romantically justified itself, looming through the weather with an insolent cliff-like sublimity. (81)

Yet was it after all that those monsters of the mere market, as I have called them, had more to say, on the question of “effect,” than I had at first allowed? (77)

教会が摩天楼という富の蓄積やその欲望を象徴する建築物の影になったことで、神の意志や人々の信仰が見えなくなり、対照的に「市場のモンスター」である摩天楼が乱立し、ニューヨークという都市の象徴となったのである。その後、ジェームズは、「ニューヨークというのは、もっと魅力的な都市になるはずだったのではないか」という疑問を抱き、それは、「ありえたかもしれない」別の可能性を探る人物を主人公にした短編“The Jolly Corner”(1908)に結実する。

## 5. おわりに

世紀転換期のアメリカは、いわゆる「金ぴか時代」を経て、資本主義の発達とともにその矛盾も露呈していた時代である。進行する都市化と人口の集中、また富の蓄積は、産業やテクノロジーの発達を伴って、超高層建築である摩天楼の出現をもたらした。本論文では、この時代と都市の記録者として、二人の作家ヘンリー・アダムズとヘンリー・ジェームズを取り上げたが、両者の著作により、中世の大聖堂における人々の高さへの憧憬が信仰の篤さの象徴であるのと対照的に、摩天楼におけるそれは資本主義的な野望の象徴であり、また、それは「俗」による「聖」の蹂躪の象徴でもあることが分かった。



## 注

\*本研究は、2013年3月30日、福岡大学で開催された第50回日本ナサニエル・ホーソン協会九州支部研究会シンポジウム『19世紀の作家と都市』で発表した「大聖堂と摩天楼—ヘンリー・アダムズとヘンリー・ジェームズのニューヨーク」の内容をもとにしている。

- 1 レム・コールハースは、マンハッタン建物の高層化について、「マンハッタンの摩天楼は、都市の特定の場所に際限なく処女地を作り出すためのユートピア的公理として仮定されている」「摩天楼だけがビジネス活動に対して、人工のワイルドウエスト〔大西部〕、すなわち空のフロンティアとしての広く開かれた空間を提供できるのである」(106)と述べている。
- 2 中世ゴシック様式の意匠や建築の象徴性については、酒井健『ゴシックとは何か—大聖堂の精神史—』に詳しい。

## 引用・参考文献

- Adams, Henry. *The Education of Henry Adams*. Mineola: Dover Publications, 2002. ヘンリー・アダムズ. 『ヘンリー・アダムズの教育』. 東京: 八潮出版社. 1971.
- . *Mont Saint Michel and Chartres*. New York: Penguin, 1986. ヘンリー・アダムズ『モン・サン・ミシェルとシャルトル』. 野島秀勝訳. 東京: 法政大学出版局. 2004.

James, Henry. *The American Scene*. New York: Bibliographical Center for Research, 2009.

—. “The Jolly Corner.” *The New York Stories of Henry James*. New York: New York Review Books, 2006. 453-500.

Poe, Edgar Allan. “Mellonta Tauta.” 355-363. *The Complete Tales and Poems Edgar Allan Poe*. New York: Castle Books, 2002.

レム・コールハース『錯乱のニューヨーク』鈴木圭介訳 筑摩書房. 1995.

酒井健『ゴシックとは何か—大聖堂の精神史—』ちくま学芸文庫. 2006.

トーマス・ファン・レーウエン『摩天楼とアメリカの欲望—バビロンを夢見たニューヨーク—』三宅理一・木下壽子訳 工作舎. 2006.

## 図表説明

画像1 New York City 1900

(<https://www.flickr.com/photos/wikimediacommons/16323203009/in/photolist-bs6sf-9gbdd9-9g2VKD-4qfKVS-4u9THU-68TCGz-qSqFyD-9UCu3J-9UzvZT-9UCsQq-9UCo9Q-9UCrSJ-9UzAng-9UCkC7-9UCp6y-4qfL61-9Uzzwz-LhEU3-6CqxEE-tx3wxU-5SYgpy-9UCnnd-6qXBd-Snpbq> アクセス2020. 09. 27)

画像2 Chartres Cathedral

(<https://www.flickr.com/photos/37804979@N00/3775516933> アクセス2020. 09. 27)

画像3 影になるトリニティ教会 (2013年著者撮影)